成長期のサッカー選手にみられた第２趾基節骨疲労骨折の１例

聖隷浜松病院　整形外科・スポーツ外傷外科
鈴木歩実　　船越雄誠　　小林良充

【目　　的】

稀な第２趾基節骨疲労骨折の１例を報告する。

【症　　例】

15歳、男性。中学校のサッカー部に所属。右利き、右蹴り。練習中に特に誘因なく右第２趾基節骨部の疼痛を自覚するようになり、症状出現から３日目で来院。初診時、右第２趾基節骨近位端周囲の圧痛と腫脹を認めた。診察上明らかな足のアーチ異常などの変形は認めなかった。単純Ｘ線では有意な所見を認めず、軟部腫瘍等の可能性を考慮しMRIを施行したところ、T1強調画像で同部位に硬化性変化を疑う低信号、STIRで同部位とその周囲に浮腫性の信号上昇を認めたため、疲労骨折の可能性を考えた。競技続行の希望が強かったものの疼痛のあるうちは競技中止とした。受傷から１ヶ月後に単純Ｘ線を再検したところ、圧痛のあった部位の周囲に骨膜反応が認められた。症状は消失していたため、この時点で競技復帰を許可した。受傷から２ヶ月半後には骨皮質の肥厚が明らかとなり、圧痛や腫脹も消失した。現在発症より８ヶ月が経過しているが、再発は認められていない。

【考　　察】

第２趾中足骨疲労骨折は頻度が多く、第１趾基節骨疲労骨折[1)]の報告もしばしば散見されるが、第２趾基節骨疲労骨折の国内報告は我々が渉猟し得る限りではなく、海外報告[2)]で１例１足のみであった。（第３～５趾基節骨疲労骨折例の報告はみられなかった。）海外報告例においても骨折部は近位端であり、骨折線も底側より始まっていた。発症機序として、基節骨近位端へのtoe off時のMTP関節伸展位での踏み返しストレスや足底腱膜のトラス機構・ウインドラス機構による牽引ストレスの反復が関与すると推測したが、今後報告例が増えるようであれば再度検討の余地があると考えられる。

【文　　献】

１）Yokoe K.et al:Stress fracture of the proximal phalanx of the great toe:a report of three cases.Am J Sports Med.14,240-242,1986
２）George P.et al:Stress fracture of the proximal phalanx of the second toe. Clin. Sports Med. 13,118-119,2003